

ピョンヤンは宣言する

9

一山村の郡党責任書記が、わずか何トンかの鋼材のために苦勞しているとき、キムジョンイル総書記は全国的な範囲で要求される鋼材問題を解決しようと、深く考えていた。

順川ピナロン工場建設場、沙里院カリ肥料工場建設場、鋼鉄工場建設場、炭鉱、鉱山などの拡張工事場、水力、火力発電所などの建設場、首都と道所在地で展開されている数万世帯の住宅建設場、北部鉄道建設場、おりかさなる山の麓^{ふもと}を抜けてはてしなく遠い平野地帯をつきぬけて伸びていく大道路建設場など... 全国で展開される建設場では、寸時をあらそう速度戦を展開しながら、鋼材、鋼材と火のように催促^{さいそく}していた。どこの建設場でも資材さえ保障すれば建設を期限前にやり遂げられると立ちあがっていた。

政務院が、一地方だけに意義をもつ数多くの小規模の建設を中止する方法で資材を確保し、重要対象の建設速度を保障しようと試みて続けざまに非常措置^{ほうじ}をとることにたいして、地方の活動家のあいだからは鋭い意見が提起された。なぜなら、地方の建設は小規模であっても、ほとんどすべて当面する人民生活と直接関係するものだったからである。

党中央委員会の当該部署は、国家計画委員会が地方の建設対象にたいする資材供給を一律にとり扱うことを批判して、対象別に了解し緊急に解決しなくてはならない人民生活と直結する対象には慎重に対処して資材を保障するようにした。資材供給は対象別に人民経済的意義にそって、あるいは、変化する国際市場の需要や激変する情勢の要求にそってたえず調節され、とくに、党と領袖の関心が高い対象にたいしては厚く調節され、各種の資材が集中的に積まれていった。

この複雑な調節がどれほど高性能のコンピューターの指令で実現したといっても、調節はどこまでも調節であり、資材の絶対的な不足を埋めることはできなかった。それは万能ではなかった。調節の後には「犠牲」がともなった。そのため、「建設が止まった」、「生産が止まった」という言葉がひそかに人々の口にのぼるようになった。調節... 繰り返される調節... 調節はやむをえぬ選択だった。

キムジョンイル総書記はあまりにももどかしくて、食事も忘れて執務室のなかをいつまでも歩き回った。社会主義の原則を捨てた変質者たちが、「ペレストロイカ」を排撃するわれわれの仕事が進捗^{しんちよく}しないことを願っているとき、彼らと脈を通じた帝国主義者がすきあらば一挙に圧殺しようと宇宙空間に偵察衛星^{ていさえいせい}を飛ばせているとき、極度の緊張がかもしたされたというのか。消極的な調節... 調節ではなく、鋼材生産の絶対量を増やして根本的に解決しなくてはならない、鉄は力だ、国の力だ。

深夜、キムジョンイル総書記は遠い北方の大黒色冶金基地への出発を前に、ハンソク書記を呼んだ。キューバのハバナで開催される社会主義国の党組織書記の会議に参加するわが党代表団の活動と関連し、さらに強調したい問題があったのである。

首都のある駅舎内のホームだった。

質素なジャンパー姿のキムジョンイル総書記はハンソク書記と並んで特別列車の側をゆっくりと歩み、淡々とした語調で言った。

「時が時だけに、代表団は会議に参加したなら、われわれの革命的原則を守りながらも、慎重に行動しなくてはなりません。東欧諸国とソ連の情勢が複雑だから、ハバナ会議でどんな予期せぬ状況がおこるか分かりません」

「はい。予期せぬ状況が生じたときには、わが国の大使館を通じてただちに報告し、党の指示を受けて行動するようにします」

「会議で論争になることもあるでしょうが、わが党の原則的立場を示しながらも、無益な論争にはまきこまれないように。キューバをはじめ一部の国の党代表が、ソ連共産党の『ペレストロイカ』に

たいするわれわれの立場を確かめようとするでしょうが、わが党の自主的立場を正確に説明し、他党の路線を非難する発言を慎むようにしなくてはなりません」

「わかりました...」

「代表団は平壤^{ピョンヤン} ベルリンの定期航路を利用するので、モスクワに降りたなら、ソ連共産党に代表団がソ連を経由していくことを伝えるのが良いでしょう」

「はい...」

「キューバの同志たちは『ペレストロイカ』の風で難関に直面しているだけに、わが代表団を格別に^{かんたし}歓迎し、『ペレストロイカ』にたいするわが党の見解と立場を具体的に知ろうとするでしょう。キューバの同志たちには、胸襟を開いてすべてを話しても良いでしょう」

キムジョンイル総書記は、遠く大洋を越えたラテンアメリカで社会主義の旗を高くかかげて闘争しているキューバの共産主義者たちを思うかのように、西の空のかなたをながめて、しばし沈黙した。

ハンソク書記はうつむいていた。

「ハバナに行ってカストロ同志に会ったら、わたしからの格別のあいさつを伝えてください。背信に怒りが爆発して内心は燃えたぎっていても、健康に留意するようにと懇切^{こんせつ}に話さなくてはなりません」

キムジョンイル総書記を乗せた特別列車は、遠い北方の大冶金基地に向かって疾風^{しつぷう}のように走った。列車が金策駅に入ったとき、ハバナ会議に参加する党代表団を乗せた旅客機が平壤飛行場を離陸したという報告の電話が入った。

金策駅に連絡を受けて出迎えにきていた咸北道党責任書記と金策製鉄所党責任書記が列車のデッキに飛び乗った。キムジョンイル総書記の列車の執務室では、ただちに鉄生産問題にたいする火のような論議がくりひろげられた。

キムジョンイル総書記は、ジャンパーさえも脱いで、半袖シャツ姿で情熱的に語った。鉄生産において基本となる隘路^{あいろ}が何であり、不足するものが何か、要求するものはすべて保障すると。二人の活動家は、まず自己批判をしてから金策製鉄所の実情について報告した。

キムジョンイル総書記は語った。わが製鉄工業の土台はしっかりと整えられている。主席が解放直後から今日までの半世紀のあいだに傾けた労苦の結実だ。問題はわれわれがどのように政治活動をおこない、生産の組織と企業管理をするかにかかっている。まず、道党委員会と製鉄所の党委員会が政策的指導をりっぱにおこなわなくてはならない。主席が深い関心をめぐらされた主体的燃料による製鉄法を速やかに完成させなくてはならない。大型、中型溶鉱炉で燃料消費基準をただちに落として、高速送風施設をはじめ、現代的科学技術設備を至急完成し、生産にはやく導入しなくてはならない。そして、鋼材生産を増やすうえで決定的意義をもつ圧延系統などを改築拡張しよう。必要な設備と資材、技術力量も補強しましょう。... 東海岸にそって走る列車の窓から、コバルトブルーに輝く朝の海が見えた。かもめの群れが飛びまわっていた。

金策製鉄所に到着したキムジョンイル総書記は、^{せんてつ}銑鉄と鋼鉄、圧延鋼材生産系統などを見回って実情を具体的に了解し、方法を教えたあと、鉄生産で重要な意義をもつ電気問題を解決するために、清津火力発電所に行った。... キムジョンイル総書記が金策製鉄所を現地指導したというニュースが三時間後には清津市に伝わり、数十万の市民が興奮と感激にみちて立ち上がった。

金策製鉄所を支援しよう、製鉄労働者を助けよう。考えてもみよ。国際情勢がこのようなときに、鉄生産問題がどれほど困難でキムジョンイル総書記が執務室を出てこんな遠いところまで来られたのかを。... 特別列車が咸興工業地区にさしかかったとき、清津では金策製鉄所の労働者の大衆集會が開かれ、少年団芸術扇動隊が吹奏楽をかなで、火力発電所に向かって行進していった。人民班では家庭の主婦の集いまで開かれた。女性たちは鉄を多く生産して、キムジョンイル総書記の心労を減らすように、金策製鉄所の労働者を心から支援しようと言語り合った。

キムジョンイル総書記が党中央委員会に戻ったのは、翌日、大成山の空に稲光りがひらめく夕方ごろだった。

乗用車は玄関の前に止まった。キムジョンイル総書記が車から降りると、リュスミョンが近づいてあいさつした。

キムジョンイル総書記は彼の暗い顔を見て、ただならぬことが生じたことを直感した。執務卓の文献の上に置いてある提議書がすべてを物語っていた。当該部門の指導部とリュスミョンが責任をもつ部署が共同で提出した文献だった。

「...製鉄所支配人のリグンウトムが作業規範を乱暴に破り、一号溶鉱炉を恣意的に止めることによって鋼材生産に混乱をきたし、社会主義建設において見過ごすことのできない支障をきたしています。」

リグンウトムは製鉄所の党委員会と道党委員会の意見を無視して、敗北主義に陥った幾人かの技術幹部と組んで、このような犯罪行為をしました。

リグンウトムは主席と党の信任によって党中央委員会委員候補になってから、忠誠でこたえることなく傲慢になり、政務院の要求にも応えず独断と専横をこととしています。

提起された意見どおりに法的な制裁を加えるのが妥当ですが、本人が功労の多い経済指導幹部であることを考慮して、党的にまず了解し、対策を講じようと思います。...」

キムジョンイル総書記は驚きをおさえず、一度、二度と読んでみて、怒りをおさえられずタバコを取り出した。好き勝手に溶鉱炉を止めるとは、製鉄所の党委員会と道党の意見も聞かず、政務院も無視して...

キムジョンイル総書記は、怒りをしずめようとソファに座り、音楽を聞いた。情熱的なピアノ協奏曲だった。悲哀の旋律が波のよううちよせたかと思うと、雷のような感情の爆発... キムジョンイル総書記の怒りを込めた感情が爆発するように... 椅子の背に頭を反らせて座っていたキムジョンイル総書記は、いつしか少し胸がおさまり、席から立ち上がった。

重い足取りで室内を歩き回っていたキムジョンイル総書記は、リュスミョンが待機室からついてきて待っているのにはじめて気がつき、彼を呼んだ。リュスミョンは執務室が重苦しい雰囲気につつまれていたため中に入ることができず、緊張した面持ちで出入口に背を向けて真っ直ぐに立っていた。

キムジョンイル総書記が、ここに来て少し座りなさいと言うと、彼は丁寧な姿勢で入ってきて安楽椅子の前に立ったが、すぐには座らなかった。

「同志たちが提出した文献を見ました。しかし、理解できない問題が少なからずあります。リグンウ支配人は三つの子どもでもなく準備された活動家なのに、妥当な根拠もなく炉を止めるだろうか? ... それも独断で...」

「溶鉱炉を長期的に補修できないままフル稼働してきたため、順番を決めて中補修、大補修をしようという意見を何度か提起してきましたが、政務院で忙しい峠を越えた後にするようにと承認しなかったところ、勝手な判断をしたようです」

「勝手に?... 独断をしたと言うのですか?」

「はい... 最初は休風をして中補修しようと言いましたが、突然、火を止めて大補修をすると提起しました。炉がすぐに爆発するようだったというのですが、政務院で調べて見ると、炉の状態がそこまで至ってはいないということです。支配人が保身主義に陥ったようです」

「それは事実ですか? トムはそのことをだれから聞きましたか?」

「問題が提起されたあと、リグンウ支配人が党中央委員会委員候補なのでおろそかにあつかえず、この問題に最初から関係した道党書記同志からも聞いて、政務院事務局参事の同志と国家検閲委員会副委員長同志の意見も聞いてみました」

「そうですか... それでは事実だということか...」と、キムジョンイル総書記は片手で執務卓を静かに叩いた。

「担当部総理同志も憤激して、最高検察署に知らせなくてはならないと言いました。検察署は自分の系統から報告を受けたようです」

「トムが知っている事実はみな、他の活動家の言葉を聞いて了解したことか?」

「...」リュスミョンは、すぐに返答できなかった。

キムジョンイル総書記は考え深い顔で、しばらく何も言わなかった。

「ここには少し異常な点がある... リグンウ... リグンウ... そのトンムが人間的にみて、上級機関をだますような愚かなことをするだろうかということです。そしてまた... トンムは以前に彼が独断と専横をこととしたという世間の噂を聞いたことがありますか？」

「以前には彼の作風上の問題について、組織的にも個別的にも提起されたことはありません」

「それならば、彼が一夜の間に詐欺師かペテン師になって、党機関も政府機関も無視し、独断と専横をはたらいたということか？ おかしいのではないか？」

リュスミョンは目を伏せて、自信のない声で言った。

「わたしは道党書記同志が分析評価した言葉を聞いて、事実だと信じました。しかし、疑問な点も少しあり、また、リグンウ支配人の党的位置から見て軽率に扱うことがないように、指示を受けたいと思います」

キムジョンイル総書記は、しばらく考えにふけていたが、電話で道党責任書記のパクユンシクを呼んだ。まもなくしてパクユンシクが出た。彼はファンセ原の道路建設場で電話を受けた。

キムジョンイル総書記が、リグンウ支配人が溶鉱炉を止めるようになった心理的動機と科学技術的根拠について具体的にたずねると、パクユンシクは気軽にこたえることができず一瞬沈黙したが、慎重な語調でこたえた。

「問題が生じた後、製鉄所にかつつけてリグンウトンムに会ってみました。溶鉱炉の前で色をなくして石のようになっていました。火が消えた溶鉱炉の中を見回しました。もちろん、炉の状態がすぐに爆発する程ではありませんでしたが、適時に補修できず、耐火物や機械設備がみな正常ではありませんでした。なにかあれば危険な状況でした。炉長もそう言いました」

「しかし、その書記は違うように証言しました。炉内壁の耐火材もいくらかも損傷がなかったと... どうして、一つのことが道党で二つの意見に分かれるのですか？」

「キムジョンイル総書記、わたしがよく仕事ができなかった結果です」

キムジョンイル総書記は寛容で従順なパクユンシクの顔が浮かび、鋭く指摘した。

「なにか問題が生じたら、ただ自己批判する式にかまえては何も解決できません。最後まで突き詰めて明らかにしなくてはなりません。どちらが本当ですか？」

受話器から底力のある声が聞こえてきた。

「炉を補修する時期になっていることは事実です。わたしはリグンウトンムを信じます。

キムジョンイル総書記！ リグンウトンムは党に誠実に服務してきた古い幹部ではありませんか。今、みなが彼をひどい奴だといって裁判にかけるべきだという意見まで出ていますが、わたしはそうすることはできません。そうしないほうが良いと思います。批判し、処罰しても...」彼の声がふるえた。

キムジョンイル総書記は厳しい局面で下部の活動家をいたわり擁護する彼の心情に胸が疼いたが、前と同じ声で言った。

「中補修をすると報告しておいて大補修をするとは、どういうことですか。なぜ、そのような手法を使ったのですか？ 大建設を将棋だとも思っているのですか？」

「リグンウトンムは浅知恵をつかう俗物ではありません。あまりに直に資材を求めて待機している人が多く心配でした。中補修をしようとしてみると、その程度では駄目なようなので、大補修をしようと思ったようです。どうしてそうしたのかとたずねても、答えませんでした。地面が落ち込むように溜め息ばかりついて言葉がありませんでした。キムジョンイル総書記、ここには、言葉にできない苦衷があるようです」

キムジョンイル総書記は、パクユンシクがリグンウと以前から個人的にも親しい間柄であることを知っていたが、彼が理由もなく庇護しようとしているとは思えなかった。まっすぐな気性の彼が、親しい友人を擁護するのはかえって難しいことだろうと理解した。

「責任書記トンム。トンムの心情は分かりました。すべてが事実ではなく、彼を許すことができれ

ばどんなにいいでしょうか。これは公にされ、憤激を生んでいる問題です。副総理... 参事、国家検閲委員会副委員長... みな的一致した意見です。... トナムがもう一度行って、直接把握してみてください。労働者のなかに入って、彼らの反響も聞き、技術者たちの意見も聞いてみて... 五日後に、わたしに直接報告してください...」

キムジョンイル総書記は五日後、道党責任書記の協議会があり招集するので、そのときに会おうと言って受話器を静かに置いた。

リュスミョンは、化石になったように動かず、じっと座っていた。

10

蒼光通りの夜は更けて、街灯さえもみな消え、まれについたままの街路灯の明りが人影のない舗道をひっそりと照らすだけだった。

通勤時間を過ぎて、部署から出てきたリュスミョンは、舗道にそそぐぼんやりとした街路灯の明りを踏み、重い足取りで歩いていった。

キムジョンイル総書記が二つの部署から提出された提議書に疑問を抱き、パクユンシク責任書記に調査を一任されたことについて考えれば考えるほど、その措置が無言の批判と思われるからだった。

リュスミョンはキムジョンイル総書記がパクユンシク責任書記と電話で話をされたと聞き、いささか驚いて額に冷や汗が出た。道党責任書記が違う見解をもっているということを感じたからだった。違うところか反対の見解であり、また客観的な見解にとどまらず、リグンウ支配人を擁よう護ごさえるものだったからである。

リュスミョンがリグンウ支配人が犯した過ちについて問い質したとき、道党書記は非常に嬉しがって、あいさつするがはやいか確認された規定事実を述べるように、炉を止めなくてはならない技術的根拠もさほどなかったと言い、道党の意見としてリグンウ支配人の固執と独断と専横について、よどみなく話した。そのとき、道党責任書記は郡に出かけて不在だった。製鉄所と直接連携をとっている党活動家の証言が、政務院の意見と同じであったため、真実であると信じた。そして、パクユンシク責任書記の意見を強いて確かめようとしなかったのだった。どちらの見解が正しいのだろうか？

その夜、リュスミョンは漠然とした呵責と錯綜した思いがこもごもに浮かび、午前零時を過ぎても眠れなかった。彼は眠気を誘おうとごろごろしたあと、おしよせる思いをふりはらおうとしてラジオのスイッチを入れてみた。瞑想的な旋律が流れ出した。彼は音楽が流れるなかに身を委ねて、つぎつぎに浮かぶ思いをふりはらおうとしたが無駄だった。

ドアが音もなく開き、巨人のような影が入ってきてラジオを消し、安楽椅子に腰掛けた。父だった。リュハンム老人は息子をじっと見つめ、重い溜め息をついた。ほろ苦く芳しいタバコの香りが漂ってきた。どうして眠れないのか、何があったのかとたずねた。息子はにっこりと笑って何もないと答え、アボジはどうして眠らないのかとたずねた。

「人間は年をとると老婆心が強くなるようだな、わしは...お前の顔色が良くないと眠れない。以前は眠れたのに... おかしいな... 党中央委員会で働くようになってからは、そうだな...」

「いえ... 本当に... 心配しないでください」

「つまらない心配だろうが... 多分、お前に何かあったようだな。大きな心配事があるのにどうして眠れるものか...」

「何もありません」

「本当か？」

「はい。どうぞおりていっておやすみください」

「ふーん。何もないと？ こいつ... わしには政治的嗅覚がないと思っているのか。以前、わしは連隊にいながらも郡党指令部で論議される問題をかぎわけ、推測した」

老人は憤りを感じたのか、息子から顔をそむけて薄明るい窓の方をながめたが、きらきらした両眼

が冷ややかに光った。

「昔、わが政治部連隊長がわしに同志的な忠告をした言葉を思い出した。何かというと、だれでも自分がすることに過剰な自信をもつと、心のたがが外れて過ちをおかすようになるということだ。つねに自分が不十分だと考えてたがをギュッと締めてこそ、仕事で隙が生じないということだよ。わしよりもっと良く分かるだろうが... 肝に銘じるが良い。どんな位置で仕事をしているのだ。

キムジョンイル総書記の近くにいるのだから、お前の仕事には針の穴ほどの隙もあってはならない...」

父の思いやりに胸が痛みながらも、自分の仕事に大きな隙が生じたようで、とても不安になった。今、パクコンシク責任書記が直接、製鉄所に行って了解した結果にしたがって、その隙間がどんな性質のものであり、どれほど大きなものであるのかが提起されるのではないのか。...

四日が過ぎて、協議会参加のためにやってきた道党責任書記たちが党中央委員会の宿所に入ったが、彼らのなかにはもちろんパクコンシク責任書記も入っていた。リュスミョンは宿所に出かけて彼らにあいさつし、協議会の日程を知らせながら、無意識にパクコンシクの顔色を気にした。パクコンシクはゆったりとした表情をしていた。自分の部屋で二人だけで会っても、生活上の話をするだけで、製鉄所に出かけたことについては一言も口に出さなかった。

キムジョンイル総書記が自分に直接報告するようと言われたので、口を閉ざしているようだった。

リュスミョンはとても気になったが、キムジョンイル総書記より先にたずねるような無礼な行動はできなかった。そのため、心のなかで、またあせった。

翌日の朝、予定通り道党責任書記たちと政務院の経済部門責任幹部が小会議室に入り、席に着いて静かに待機していたが、キムジョンイル総書記は出てこなかった。周辺諸国の激変する情勢とそれにそった南朝鮮当局の危険な動きに対処して、強力な措置をとる問題について、当該部門の幹部と夜を明かして討議し、その日の朝にも具体的な指示をされたようだった。そうして、協議会は後に延期されることになり、そのかわりにハンソク書記が出てきて、ソ連共産党の「ペレストロイカ」政策と市場経済へ移行するソ連経済の実態資料について報告した。

ハンソク書記は落ち着いて沈着な語調で述べた。社会主義的計画経済から市場経済への移行を強行するソ連経済は、深刻な混乱と破綻の淵に陥っている。しかし、彼らは市場経済への歩みをためらったり、止まろうとはしていない。所有形態の多様化を提唱し、全人民的所有と協同的所有を個人的所有に転換しようと策動しながら、社会主義制度の経済的基盤を根本から揺るがしている。彼らは歩みごとに社会的不満をかもし出し、大衆からの疑惑、不賛同、反発にぶちあたっている。小規模の産業網と便益サービス施設から私的所有に移し私営化しようとしているが、それさえよくできずにいる。これについて英国のある経済学者は、現代のソ連人は私的所有にたいして根深い疑念があり、利潤追求にたいする強烈な欲望が欠如しているため、自由化過程が長くかかるだろうと嘆いた。

彼らは目の前で起こっている貧窮と混乱を過渡的現象であると弁明し、「ショック療法」で経済に活力をよびおこすと騒ぎ立てながら、今後、価格の自由化まで実施しなくてはならないと主張した。これについて、ソ連の進歩的な経済学者はもちろん、西側の一部の経済理論家までも、競争対象の企業がいくらかない超独占的なソ連経済において、価格の自由化が実施されれば物価が暴騰し、貨幣膨脹がおこり、ごく少数の百万長者が生まれる反面、民衆ははなはだしく貧窮化する国に転落するだろうと予測している。ソ連共産党と政府の高官のなかでも、混乱に陥った経済を收拾するためには、強力な中央集権的な計画経済に戻らなくてはならないという声が上がっていた。マスメディアを掌握した「改革派」は、自らの御用ラッパ手を総動員して、ソ連と東欧の計画経済支持者を「保守勢力」とひっくるめて、彼らにあらゆる誹謗中傷の砲火を浴びせていた。

社会主義経済体系、計画経済では経済を発展させることはできないということである。

...ハンソク書記は、このような環境のなかで、朝鮮式経済制度の優越性を発揮するのが重要だという言葉で、報告を結んだ。

20分の休憩の後、みなが席に着いたとき、キムジョンイル総書記が、精力に満ちた明るい顔で小会議室に入ってきた。全員立ち上がって、キムジョンイル総書記に熱烈な拍手を送った。拍手の音に、

小会議室の空気がざわめいた。

キムジョンイル総書記は彼らの歡呼に手をあげてこたえてから席に着き、遅れて済まなかったと言いい、協議会を始めようと言った。

政務院の責任幹部と道党責任書記が順番に立ち上がって、経済建設状況について、成果と不足点について報告し、至急解決すべき問題について意見を述べた。

キムジョンイル総書記は、彼らの意見を注意深く聞いて、ときおり必要な問題をすばやく手帳に書き込んだ。国の全般的な経済建設は計画通り力強く進捗していた。しかし、部分的には至急解決しなくてはならない問題があった。どこでも原料と資材、動力の不足を感じていた。それは経済建設の非常な速度によって生じる一時的な現象ではあったが、社会主義建設に支障を与える深刻な問題だった。石炭生産、鉱物生産、電力生産とともに、鉄道輸送にたいする意見も多数提起された。

キムジョンイル総書記は、活動家の発言の途中に、われわれの前に切迫している難関がどんなに大きくても、前進途上に生じた難関であり、道党全体が経済建設で党の大衆路線を確固と堅持し、党员と勤労者のなかで政治活動を力強くくりひろげ、大衆をうごかす方法で解決しなくてはならないと重ねて強調した。

政務院のある責任幹部は、重要対象別圧延鋼材の不足量について数量的に列挙し、このような緊張したときに、保身主義、敗北主義によって重大な支障を与えた、ある製鉄所支配人の無規律な行為について報告した。場内の空気が緊張した。

キムジョンイル総書記はやるせない表情でその幹部をながめた。

「トムにも報告しなかったのですか？」と、キムジョンイル総書記はやや低い声でたずねた。

「中補修だと虚偽の報告をしました。調べてみると、炉が大きく損傷したわけでもないのに、保身主義にとらわれて爆発すると泣き言の報告をして、炉を止めるような行動をしました」

「トムが現場におりていって了解したのですか？」

「報告を受けて知りました」

「座りなさい」

キムジョンイル総書記は、前列の右側に座っているパクコンシク責任書記をふりかえった。

「責任書記トム、製鉄所に出かけて把握してみましたか？」

協議会参加者が注目するなかで、パクコンシクが重々しく立ち上がった。彼の平べったい顔に深刻な色があうかんでいた。パクコンシクは製鉄所に出かけて、四日間泊まり込んで、リグンウ支配人と各生産指揮員に会い、労働者階級のなかに入って把握したと沈着な語調で報告した。

「リグンウトムが中補修をして炉を止めたことは事実です。彼は処罰を受けるのは当然です。本人も胸を叩いて処罰してほしいと言いました」

パクコンシクは、リグンウの過ちではなく自分の罪であると、苦しげな顔で言った。

キムジョンイル総書記はあきらめきれず、静かに悩ましげに息をついてたずねた。

「そのトムは、どうしてそうしたのですか？ リグンウトムは誠実で真正直な働き手として知られているのに...」

「今回、出かけて何度も問い詰めましたが、リグンウトムは返事をしませんでした。処罰してほしいということだけしか言わず... 技術者の意見や、炉長の話も聞いてみました。支配人トムが事前に報告した際に、このように緊張したとき炉を止めるのか、大補修をする期日でもないのにと断って承認してくれませんでした。だれも結論を出してくれなかったからといって、そのまま稼働すれば危険だとリグンウトムは判断し中補修をしましたが、炉の状態が危険な界線に至っているのを発見し、火を消しました」

「ちょっと... そこにはおかしな問題があります！ 大補修期日前なのに、どうして危険なのですか？ 大補修期日というのは何にもとづいて決められたものですか？」

パクコンシクは目を伏せて閉じ、何かを考えていた。冷や汗が流れた。

キムジョンイル総書記は考え深い目で座中を見回し、低い声で言った。

「リグンウ支配人が保身主義、要領主義を犯したということですが…… わたしは彼の性質を知っています。ここには、何か彼が言っていないことがあります。すべて自分が責任をとろうとして……」

「そうです……」と、パクコンシクが口を開いた。

「大補修期日は炉壁内の耐火レンガが溶鉄の熱と衝撃に耐えられる期間を基準にして決められるものです。ところが、レンガの質が悪くなって、その期日前に危険信号が出ました。火を消して見ると、炉内壁が大きく損傷していたとのことです」

「だから、耐火レンガの質に問題があったのだな…… 支配人は耐火レンガの質が悪いということを知らなかったのですか？」

「知っていました。それで、質のよいものを要求しましたが、すぐに解決できそうもないのに溶鉄生産はしなくてはならず、そのまま、炉を築造しました。その場合は、炉の管理をよりよくしなくてはなりません、鋼材生産が急なので、小補修も適時にせず炉を酷使しました。支配人トムムの責任も大きいです」

「根本原因は耐火レンガにあるのではありませんか？ そんな耐火材をあてがっていながら大補修期日前に火を消したからといって、保身主義、敗北主義のレッテルをはって、罪人扱いにまでしようとしたというのですか？ これは官僚主義ではないか！」

キムジョンイル総書記は怒り、きびしい声で言った。

「責任書記トムム、支配人にたいする労働者の評価はどうか？」

パクコンシクは顔を紅潮させて、キムジョンイル総書記を見つめた。

「溶解工たちは、自分たちと十余年間、生死苦楽をともにしてきた支配人が解任されるという噂を聞くと、みな憤慨しました。炉の側にいる検察幹部にしきりに抗議しました。炉が危ないために火を消したのに何だというのだ。保守期日を機械的に守って炉を爆発させた方がよかったのか、と言って… 支配人同志は平素から労働者のなかで信望が高い人です。製鉄所でもっとも年長の功勲溶解工の老人は、リグンウ支配人は妻が死亡したときにも、葬式を済ませるとその日に職場に出てきて、生産指揮を続けたと話してくれました。…」

キムジョンイル総書記は驚いて、彼の妻がいつ死亡したのかとたずねた。パクコンシクは、目を伏せてすぐに返答できななかったが、自分の悲しみであるかのように沈んだ声で昨年とかるうじて答えた。

「そのときに、どうして報告しなかったのですか？」

パクコンシクが答えることができずうなだれていると、一番後に座っているリュスミョンが立ち上がって、自分の落ち度だと言った。

「報告を受けても、わたしに知らせなかったということですか？」

「…」

「支配人の妻が死亡したというのは、小さな問題ではないでしょう…」

そして、パクコンシクの方をふりかえった。

「それで、支配人同志はどのように暮らしていますか？」

「子どもたちがみな道所在地と平壤^{ピョンヤン}で暮らしているので、独りで生活しています。食事は宿所で済ませて… 今回たずねてみると、道に会議で行かねばならないのに新しいワイシャツがなく、古いワイシャツを自分で洗って事務室の椅子にかけて干していました」

キムジョンイル総書記はそれ以上たずねなかった。キムジョンイル総書記は胸が痛むのか、しばらく言葉がなかった。

「同志たち、少し考えてみましょう。わが国のマグネシアクリンカは世界的に広く知られています。それなのに、耐熱能力が高い耐火レンガを適宜に保障できなかったということですか。あるときは質のよいものを供給し、あるときには質の悪いものを供給し… そうして、このような問題が生じました。質の悪いものを供給しておいて期限前に炉を止めたことを、だれを追及できるでしょうか？」

場内がざわめいた。

「最近、中央から製鉄所に多くの指導幹部が下りて行きましたが、だれもこのような問題を解決し

ようと心を砕かなかったし、深刻なこととして提起もしませんでした。苦境を知っても他人のこのようにみなしたのです。そして、引き続き鋼材を出せと要求し、その要求にこたえなければ非難を浴びせました。援助はせず要求だけするとはどういうことですか？ きょうは同志たちがそれぞれ石炭、電力、鉄道輸送について多くの意見を提起し、それらはみな正しい意見ですが、まず自分がその困難な部門をどれだけ助け支援したのかを反省してみたなら、もっと良かったでしょう」

協議会参加者たちはうなだれて、キムジョンイル総書記の言葉を書きとめ始めた。咳払いひとつしなかった。胸を引き裂く自責のなかで沈黙が流れた。

「みな、胸に手を当てて考えてみなさい。自分が指導する下部の単位、下部の活動家の活動上、生活上の苦衷にどの程度胸を痛み、解決しようと骨をおったのか？... 上部が下部を助けるのは、わが党が一貫して堅持している指導原則です。皆さん、主席が青山里を現地指導された歴史だけでも思いおこしてください。われわれははやくから上部が下部をよく助けるための処置として党中央委員会の指導グループを派遣しています。このすべてのことは、みな下部を助けるためにとられている措置です。世界のどこの国の党にもこのような体系はありません。党の総書記から郡党の部員にいたるまで、人民のなかに入り、生死苦楽を共にし助ける人民的な活動体系は、主席が実践的模範を創造され、わが党の伝統として発展豊富化してきたものです。しかし今日、一部の指導幹部のなかには、言葉では下部を助けると言いながら、下部の指導を形式主義的に出かけて官僚主義的におこなう、がまんできない現象が現れています。現段階で社会主義大建設がどのように進捗するかということは、下部の単位をどのように、どれだけ援助するかに大きくかかっています。リグンウ支配人の問題もそうです...」

キムジョンイル総書記は、彼を処罰するのではなく助けなくてはならない、彼がひっかかっている問題を解決する決定的な対策をたてなくてはならないと、情熱的に語った。キムジョンイル総書記の人情味あふれる言葉によって、場内にあたたかい空気が流れた。

キムジョンイル総書記は、最前列の端に座っている咸興北道の道党責任書記の方をふりむいた。

「咸興北道を現地指導された主席は、鉄峰鉱山についてとても心配されました」

キムジョンイル総書記は、鉄峰鉱山に二～三年前から除隊軍人が多数いったが、住宅不足のため結婚したばかりの夫婦が他の人たちと共同生活をしており、心安く暮らせないと気にされていることについて話した。

「指摘を受けたあと、どんな対策を立てましたか？」

道党責任書記がたちあがった。

「住宅を大々的に建設するようにしました。わたしが会議のために来るとき確かめたところ、基礎がみなできていました」

「なんと、今ごろ基礎ができたというのですか？ 鉄峰鉱山の党書記はどんなトンムですか？」

「党中央で活動したあと、鉄峰鉱山におりてきたトンムです」

「経歴を聞いているのではありません。人民にたいする思想観点を正しくうちたてたトンムですか？」

「党に忠実なトンムで、鉄鉱石の生産が逼迫しているというので...」

「擁護するのはやめなさい。党に忠実なら、どうして党と領袖が願う通りに仕事をしないのですか？ 主席は雨の降りしきる日、雨傘をさして同居世帯をたずねられたのに... 80歳の高齢の主席が... どんなに心配されたのか... 良心があるのですか？ 今やっと基礎をつくったとは... 資格がありません。資格が...」

キムジョンイル総書記の峻烈な批判に、室内の空気がピンと張りつめた。道党責任書記はみな自分の道でおこったことのように、うつむいていた。

「キムジョンイル総書記、おりていって決定的な対策を立てます！」 彼はハンカチで額の冷汗をぬぐった。

「批判をきびしくおこなって、革命的な処置をとります！」

「人のことよりも鉄鉱石を先に考えるなんて... 人々の生活問題は後に押しやって、鉄鉱石だけでも

っと多く... もっと多く掘るように要求できるのですか？ これは、わが党の一貫した政治方式、仁徳政治に反する官僚主義... 官僚主義です！」

キムジョンイル総書記は憤りで上気した顔で、道党責任書記をふりむいた。

「リグンウ支配人の問題もそうであり、この問題を見ても、われわれの経済部門に依然として官僚主義が残っていることを示しています。解放直後から半世紀の間も闘争したのに... ハンソク書記が詳細に報告したと思いますが、今日、官僚主義は一つの作風上の問題ではなく、社会主義をはなはだしく害する政治的問題として浮上しています。『ペレストロイカ』の提唱者とその追従勢力は、ソ連の政治体系を民主化するという口実のもとに多党制を導入し、反動的な右翼政党が政治舞台に合法的に登場する道を開きました。その右翼政党が社会主義制度を攻撃し、^{てんぷく}転覆させる先頭にたっています」

道党責任書記たちは手帳にペンを走らせて、キムジョンイル総書記の言葉を書きとめていった。

「攻撃の矛先はわが国に集中しています。われわれの党活動家は、民衆のなかに深く入り、生死苦楽を共にして、母親の心情で人々を信じ、愛し、いたわり、助けて、党の回りにしっかりと団結させなくてはなりません。権力で統治する政治ではなく、人々に忠僕として服務し、信頼と愛で導く政治... わが党の仁徳政治こそは、反社会主義攻勢のなかで朝鮮式社会主義を守り、輝かせることができる唯一の政治方式です」

キムジョンイル総書記は、鉄峰鉦山の問題もこのような角度から、深刻に分析・批判し、ただちに住宅問題を解決しなくてはならないと言った。

「鉦山党書記の活動を全面的に了解し、積極的に助けなければなりません。わが党は執権党であり、われわれの社会は組織化された社会であるから、どこであろうと党書記がしっかりしていれば仕事がりにできます」

キムジョンイル総書記はわが党の政治哲学について、ひきつづき述べていった。

11

車窓の外を街路樹が走り過ぎていった。

パクコンシクは後ろの座席にゆったりと座っていたが、心はととも不安で重かった。協議会でのキムジョンイル総書記の言葉が、彼に大きな衝撃を与えたのである。彼はつねに下部の単位の活動家を助けようと、製鉄所にもしばしば出かけたし、ミルドン原に行ってグループ員や農場員とともに畑の草取りをしながら談話もし、細胞総会にも参加したが、下部を助ける活動が円滑にすすんでいるとはいえなかった。とくに、気にかかっていることは、道と市、郡の党活動家の実地体験だった。

彼は実地体験に出かけたすべての道党活動家と市、郡党責任幹部の総括報告書をくまなく読んだが、談話を通してその状況を深く了解することはまれだった。一部の活動家は、仕事が忙しいことを口実に、定めた日に実地体験に出かけないこともあった。製鉄所に実地体験に出かけてきた活動家が耐火材の問題を提起したことは一度もなかった。...

パクコンシクは運転手に道党にではなく、製鉄所にまっすぐ行こうと言った。

支配人室には、タバコの煙がこもっていた。リグンウは長椅子に斜めに寝そべっていたが、がばっと起き上がり、大きく目を見開いて自分の前に近づいてくる道党責任書記を見守った。黒ずんで血の気のひいた彼の顔には^{ほんもも}煩悶のあとがありありとしており、口唇には水泡までできていた。薄くなった髪の毛にも、作業服の肩や胸元にも、^{ほいろん}煤煙のようなものがうっすらとつもっていた。彼はすべてを覚悟した人の顔をしていた。パクコンシクはそんな表情にはかまわず、ぶっきらぼうに言った。

「これは熊の^{どうけつ}洞穴じゃないか。熊の洞穴だ！ なぜ、タバコをこんなに吸ったのかね？」

そして、つかつかと歩いて行って窓をぱっと開けた。リグンウは長椅子の前になだれて立っていたが、全身で解任なのかとたずねているようだった。

「ここに座りなさい！」

かれは座らなかつた。

「責任書記同志、炉にまた火をつけたあとに（解任を）発表してください。同志としてお願いします」

「うむ。... えらいよ。えらい...」

パクユンシクは厳格な目で彼をにらんだ。

「図体ばかり牡牛のようにでかくて... そんなにうなだれていてどうするつもりだ？」

「老齢保障は絶対受けません。溶鉱炉で溶鉄をつくります。炉の前で殉職^{じゅんしよく}させてください」

その声に胸がじーンとして、それ以上聞くことができず、口のなかでつぶやいた。

「小心者だな... 小心者だというのだよ...」

そして、彼の肘をつかんで椅子に座らせた。リグンウは驚いて上目使いに見た。パクユンシクがキムジョンイル総書記の言葉を伝えるとき、支配人は火のような目で彼を見つめた。

「自己批判をよくおこなおう！」

リグンウの大きく見開いた目が潤んだ。

翌日は金曜日だった。

パクユンシクは、道党をはじめ、すべての道の機関の幹部を集めてファンセ原に出かけ、道路工事に参加した。金曜労働に出てきた数千名の活動家と忠誠の道路建設突撃隊員たちは一か所に集まってワイワイとわきたって道の舗装をおこなった。人と機械は野原を突っ切って長く並びたち、作業がおこなわれた。人々はシャベルで土をすくい、鍬で掘り起こしを大急ぎでおこない、土砂を運び、氣勢よくとびまわった。機械のエンジンの音、宣伝車から聞こえてくる歌声、人々の喚声で百里の野原がはじけるようだった。だれの顔も、道をりっぱに舗装して主席の万年長寿を保障しようという忠誠の一念に燃えていた。道路工事を開始していくらもたたないのに、どの作業区間でも路盤がほとんど舗装された。

パクユンシクが社労青員たちとともに汗を流してスコップをふるっていると、近所の郡党から若い活動家が息を切らして走ってきて、党中央委員会から緊急の電話がきたと知らせた。パクユンシクはどのようにして郡党までかけつけたかわからなかった。

郡党責任書記の部屋だった。受話器から電流の流れのためか、遠い風のような音が聞こえ、親しげなキムジョンイル総書記の声が聞こえてきた。胸がいっぱいになった。

「キムジョンイル総書記、お元気ですか？ パクユンシクです」

「金曜労働をしているのですか...」

「はい...」

「ご苦労様です。今朝、主席が一号溶鉱炉の大補修をよくおこなうことについて、提起されました。質のよい耐火レンガと性能のよい機械設備を保障して、中央と道で積極的に助け、最短期間に大補修を終えなくてはならないと言われました。支配人の責任が大きいので、よく批判しなくてはなりません」

「はい...」

「主席はリグンウ支配人の妻が死亡したことについて、とても胸を痛められました。支配人が宿舎で食事をとり、自分でシャツを洗って着ているようで、どうするのだと言われて...」

「ええっ?!...」

「責任書記同志、彼の意向を聞いてみて、強い抵抗がなければ結婚させてはどうですか？」

パクユンシクは、瞬間、喉がつまってすぐに返答できなかった。

「ありがとうございます。わたくしどもは全く考えもしませんでした」

「それでは、同感だということですね？」

「はい。そうです。彼の世話をする伴侶がいれば、どんなに良いでしょうか！」

「責任書記同志の考えも同じで、よかったです。ハハハ...結構です。しかし、リグンウ支配人は還暦もすぎているので見合いのため出歩くこともないでしょう。広く宣伝することでもないし... 同志がそっと相手を探してみてもいいですか？」

「わかりました」

「彼の好みと女性観... 意向を十分に考慮して、相手を探さなくてはなりません。われわれが勧めたと知れば、彼が自分の気持ちを隠して応じる可能性があるのです、そんなことは絶対に言うてはなりません。わかりますか？ このようなことには、人の個性がいちばん強く作用し... また、どんな婚姻であっても選択的な感情に基づかなくてはならないと思います。彼に選択の自由が十分に保障されなくてはなりません。わかりますか？ すべてを責任書記が発起し、主導するようにしてください。わかりますか？」

「キムジョンイル総書記、安心してください」

「彼の自尊心と人格を損なわないように、芸術的にしなくてはなりません」

「はい... わかりました！」

その日の夕方ごろ、パクユンシクは製鉄所に出かけ、リグンウ支配人に会った。鋼鉄職場の屑鉄の山の側だった。彼らは平たい横広の鉄板を敷いて、並んで座った。

パクユンシクはあれこれ生活上の話を交わしたが、いつまで宿舎で食事をとり、シャツも自分で洗って着るつもりか、自分の身のまわりの世話をする細やかな手があったら良いのではないかと言った。

リグンウは寂しげな顔で、重い溜め息をついた。すると、パクユンシクは結婚を考えたらどうかと、単刀直入にきりだした。リグンウはどぎまぎして笑い、人をからかうつもりかと言った。パクユンシクは真顔で、トムムの生活で不便なことが多くては、支配人の役割をりっぱにはたすことができないから、慎重に検討して意見を言ったのだといった。リグンウも真顔になった。彼は、自分としても、結婚を考えないことがあるのか、だからといって、年寄りと結婚しようという女性がいるだろうか、程よい家政婦でも一人つけてほしいと言った。パクユンシクは、彼の言葉をさえぎった。家政婦を置けば、くだらない噂がたたないともかぎらない。正式に新しい妻を迎えなくてはならない。わたしが良い相手を探してみよう。

かぶりをふっていたリグンウは、にわかに熱が上がり電気がともったような目で、彼をじっと見ていたが、どこか当てでもあるのかとこっそりと言った。パクユンシクは彼の背中をぴしゃりと叩いた。どんな女性がいいか、条件を言え、地の果てまで行っても、条件にかなった美人をさらってきてやると、大きな声で言った。

リグンウは笑わなかった。しばらく考えて、五つの条件があると言った。パクユンシクは還暦をすぎた男がどういう分際かも知らず、こんなに難しいことを要求するのかと内心しゃくにさわったが、じっとがまんして彼が話した条件を手帳にかきとめていった。

- 一、年齢は 40～50 歳程度。
- 二、高等中学校卒業以上の知識水準。
- 三、人物は地味が良いが、教養があって文化的であること。
- 四、物の考え方が健全であること。
- 五、病気がないこと。

聞いてみると、それほど難しい条件ではないようだった。しかし、その条件にかなった相手を探すのは、けっしてたやすいことではなかった。

なぜかという理由は知らせず、下部の活動家を通じて道の機関と教育、保健部門、便益サービス網までくまなく探してみたが、ぴったりの相手はみつけだせなかった。内心あせってきて、探索範囲をだんだん広げ郡まで探してみたが、心にかなった相手がいなかった。彼は、他人ではなく婚期をすぎた肉親の相手を探すかのように、熱をあげてそのことに没頭し気をもんだ。15 日間が過ぎたある日、道党管理部長といくつかの後方管理事業問題について議論したあと、だれかいないかと訴えたが、彼は難なく、自分が探してみせると見栄をはり、道党宿舎の賄まかないのカンミオクはどうかと言った。

パクユンシクは膝を叩いた。まさにすぐ近くに最適の人がいるのに、遠い所を探していたのだった。

カンミオクはぼろぼろ涙を流して拒絶した。調べてみると、宿舎の女性たちが、看護婦の役目をしたあげく、つまらない責任をとるために、そんなお爺さんの所に嫁ぐのかと反対したというのだった。

パクユンシクは管理部長に手強い女性たちをなだめさせて、カンミオクに再び会ったが、やはり応じなかった。そうであればあるほど、五つの条件がそなわった女性の姿に心を引かれた。年は50歳に近いが色艶もよく清楚な美しさとほのかな品格を十分に備えた女性だった。清々しくさっぱりと整えた髪、くすみのない肌、しっとりとした情をたたえたまなざし、片方の頬のほくろは純朴な少女のようでもあった。彼は心の中で、この女性を何度もリグンウの側に立たせてみて、非の打ち所がないと考え、百回切りつけて倒れない木はないという諺^{ことわざ}まで思いうかべながら、説得しようとした。

その日の夕方には、カンミオクを事務室に呼んで対座し、腹を割って話した。相手は製鉄所支配人のリグンウトムだ。彼は鉄生産でわが党をささえる重責を担う経済指導幹部であり、個人生活の世話をする人がいなくて孤独に暮らし、仕事と生活で少なからぬ困難を感じている。党的な立場から考えて、彼の伴侶となって生活の世話をしてくれないか。... 女性はうつむいて返答しなかった。道党責任書記の懇切こんせつな勧めと党的な立場という言葉に安易な対応をすることができず、慎重に、考えに考えたようだった。

まずパクユンシクは、なんとかして口を開かせなくてはならないという思いで、新しい工場を建設するにも、都市を建設するにも、機械や鋏^{はさみ}、包丁、針、洋傘、クリームの容器などの必需品を作るにも、鉄、鉄、鉄が必要だと話した。そして、兄弟や親戚などに製鉄所に勤めている人がいないのか、製鉄所にいったことがあるかとたずねた。女性は、消え入りそうな声で三～四回行って見たことがあると言った。その言葉がなかば承諾したもののよう聞こえ、パクユンシクの喜びは並大抵ではなかった。しかしそんな素振りは見せず、リグンウ支配人に一度会ってみる気はないか、会ってみてから断っても別にかまわないだろう、内緒で一度そっと会ってみても、たいしたことはないと言った。女性は慎ましく顔を伏せたまま、返事をしなかった。しかし、以前とは違って従順な感じだった。

パクユンシクはなにか緊急なことで生じたように、席からすくっと立ち上がって電話に近づいた。リグンウを探した。彼が出ると、見合いの相手を連れて今すぐに出かけるので、事務室で待機するようにと言った。女性は運命の急展開を予感して、当惑^{とつわぶく}し、恐怖にかられたような目で彼を見つめていたが、その視線は少しだけ待ってほしいと哀切に叫んでいるようだった。しかしパクユンシクは、鉄は熱いうちに打てということだけ考えているように、そんな微妙な心情にはお構いなく、女性を引っ張って外に出て、車に乗った。

リグンウ支配人は電話で言われた通り、自分の事務室で待っていた。いつも地味な印象だった彼は、頭に油を塗りきれいに髭^{ひげ}を剃^そってさっぱりした顔で座っていたが、パクユンシクが女性をつれて部屋に入ると、若者のようにすくっと立ち上がった。

そして、女性の方は見ずに道党責任書記にだけ、いつになく格式ばってあいさつした。

パクユンシクは二人に互いにあいさつをさせて、十分に話をするようにという言葉を残して外に出た。

支配人室の窓には陽の光が明るく差し込んでいたが、室内でどんな会話が行き交ったか、互いに相手からどんな印象を受けたのかまったく見当がつかず、時間が過ぎるほどじりじり焦ってきた。几帳面なところなどまったくないリグンウ... あの熊のような男が、なにか馬鹿なことを言って女性を驚かせたか失望させたのではないのか、嫌だというのを愚直に強要して、女性を怒らせたか泣かせたのではないだろうか。...

彼はむやみにタバコを吸い、庭をゆっくりと歩き、後ろ手をしてぼんやりと立ち、冶金基地の薄明るい空をながめもした。一時間余り過ぎてからだった。後ろで足音がした。驚いて振り向いた。リグンウが遠い道を走ってきたかのように息をはずませながらゆっくり近づいてきた。どうなったのかと性急に聞いたが、うなじをゆっくりとさすりながら、人間とはつきあってみてこそ深く理解できるのではないのかと、漠然としたことを言うだけだった。

その煮え切らない態度にカッとなって、嫌だということか良いということかと声をあげて、彼の手をそっと握った。その手は熱い鉄のようだった。

翌日の夜、支配人の家で質素な結婚の祝宴がおこなわれた。連合党責任書記と副支配人をはじめ、

七～八名の客が部屋に入ろうとしたとき、一台の乗用車が庭に入ってきた。みな驚いてふりかえった。車から、ソントン郡党責任書記がおり、運転手がみごとな果実がぎっしり詰まった箱をおろした。「これはどうしたことだね？」と、道党責任書記がとても喜んでたずねた。チャヨンジンは穏やかですっきりした目にいっぱい笑みを浮かべて、道党責任書記と皆にあいさつした。

「支援物資を積んできたら噂を聞きました。こんな喜ばしい日に、じっとしていられますか？」

「ありがとう！」

皆が彼を部屋のなかに招き入れた。

12

それは結婚の祝宴というより、祭日の質素な酒宴に近いものだった。大きな丸い台付きのお膳を二つくっつけて、その上に何本かの酒と肴の皿をのせ、茶菓を並べただけだった。上座に座ったリグンウとカンミオクの胸には、白い花リボンすらなかった。彼らの横に道党責任書記が座り、その前に連合党責任書記や副支配人が囲んで座った。チャヨンジンは来賓として下座の方のお膳の業務部支配人の次の席に座った。

道党責任書記が二人の結婚を祝賀する短めの発言をしたあと、皆で祝賀の杯を上げた。一回、また一回... いつしか宴席には酒が回ったが、普通の結婚式のようにアコーディオンの音や歌声もなく、愛情細やかに楽しく暮らすようにとか、子どもを家にあふれるほどたくさん産むように、などという騒々しい冗談もなかった。だれもが真面目な顔、心情のあふれる声でカンミオクに、支配人同志をよく世話してほしいと、重ねて頼むばかりだった。

チャヨンジンは何も言わず、考え深い顔で酒の杯ばかり空けていた。かれは以前、溶鉱炉の大補修問題で製鉄所支配人についての評判を聞いた。彼自身も鋼材を受け取ることができず、製鉄所にたいする意見と不満がないわけではなく、支配人が処罰されるのは当然だとまで考えたことがあった。ところがきょうは、同志たちの祝福のなかで再婚し、自分はその祝いの席に座っているではないか。彼は予想すらできなかった運命の変化に大きな衝撃を受け、感慨無量で黙々と酒ばかり飲むことになったのである。酒の味がまた格別だった。まったく苦くなく甘美だった。リグンウも幸福感と満足感に陶醉しているためか、あるいは酒に酔ったためか、パクユンシクの手首をつかんでありがとうと言った。

なぜか、パクユンシクはそれにはこたえず、席からゆっくりと立ち上がり、熱気に燃える目で座中を見回した。皆、何か始まるのかという予感で彼に注目した。

「わたしが少し話をしよう。... みなさん。いままで言わなかったのだが、実は...リグンウトムとカンミオクトムが結婚することになったのは、すべてキムジョンイル総書記の配慮なのです。リグンウトムが自分の生活上のことで苦労しているとき、キムジョンイル総書記は主席にトムが個人生活に不幸があり、不便な生活をしていることをすべて話されました。主席は、非常に胸を痛められました。トムに身の回りの世話をする人が必要ではないかと考えられ、再婚するように助けてやろうと発起されたのも、キムジョンイル総書記です。この問題について、総書記がどれほどあたたかい関心をめぐらされたか、だれも知りません。...」

そして、二人の感情と意向を深く考慮して、選択の自由を十分に保障するために、キムジョンイル総書記が結婚を勧めたことについては絶対に言うてはならないと依頼されたことまで話した。人々は非常に驚いてざわめき、リグンウは魂がぬけたような顔で、道党責任書記を見つめていた。カンミオクは両手で顔をおおった。

(ああ!...) チャヨンジンは胸が熱くなり、爽快な気分がわきおこって頭がクラクラするようだった。リグンウが潤んだ目をしばたいて立ち上がり、鉄生産で配慮にこたえると誓う言葉が、拡声器から聞こえてくる音のように大きく共鳴し、脳裏にこだました。... いままで知らなかった。何という信頼、何という愛が背後で後押ししてくれたのか... 全身にわきあがる青春の情熱によって、決

死の覚悟で鉄をガンガン生産しよう。社会主義建設が要求する各種の鋼材をのこらず生産し保障する。この誓いを親愛なるキムジョンイル総書記に！

皆が感激と興奮に身をまかせ、テーブルを叩いて祝福と決意の言葉をにぎやかに述べたあと、パクユンシクが道党に帰ってやることがあると言いながら、席から立ち上がった。チャヨンジンもつづいて立ち上がった。

リグンウ支配人は玄関までついて出てきて、道党責任書記に感謝のあいさつを重ねて述べ、チャヨンジンの手も熱くにぎった。

「責任書記トムム、たびたび支援してもらい感謝しているよ。ソントン郡に優先的に鋼材を保障するようにしましょう」

二人が彼を中に入ると押しかえしてから、車が止まっているところに出ようとしたとき、庭に十数名の人々がどよどよと押しかけてきた。

溶解工たちだった。四～五名の方はガラス瓶の音がするケースや袋をもっていた。体のがっちりした炉長や功勲溶解工をはじめとする溶解工たちは、どこから匂いを嗅ぎつけてきたのか、すでに祝宴の酒にほろ酔い機嫌にでもなったように、道党責任書記にあいさつし、支配人が一生の運命を変えるときに溶解工がじっとしていられようか、われわれがいなくて婚礼式典がとどこおりなく終わることなどあるかと飛んできた、などと冗談まじりに騒ぎたてた。

道党責任書記は好人物らしくにっこり笑い、前もって知らせなくてすまなかったとわびると真面目な顔になり、キムジョンイル総書記の恩情でこんな幸福がもたらされたのだから、早く入ってあたたかく祝賀してやりなさいと勧めた。

二人の党活動家は、彼らが家のなかに入ったあとも車に乗らず、にぎやかな祝賀の言葉と思いやりに満ちた笑い声、皿やコップのぶつかる音が聞こえてくる灯火の明るい窓を見つめた。

だれかが涙声で叫んだ。

「おい、炉長、俺が何と言ったか！ え？ 支配人が悩んでいるとき、このユンガビーの殿様は支配人が落ちると言っただろう？ キムジョンイル総書記はわれわれ労働者の気持ちを一番よくわかってくれる領袖だよ！」

「いや、その通りだ。万歳でも叫ぼうじゃないか。この佳日^かにぴったりじゃないか？」

「こいつ一 夜も更けてきたというのに、万歳は心のなかで言うもんだー」

その瞬間、構内機関車の汽笛が壮快に響き、冶金基地^{やきん}の広々とした上空には大火災の炎のような真っ赤な夕焼けが赤々と燃えた。...

乗用車はヘッドライトの光で闇を切り裂いて矢のように走り、チャヨンジンは座席にゆったりと座っていた。前に道党責任書記の車が走っていたが、その車の赤い後部ライトがたえず点滅していた。

ヨンジンは胸にあふれる喜びと興奮を静めようとタバコを吸い、車窓の外を流れる野原の夜景に視線を向けた。まどろみについたような稲穂の海の絶えることのない流れ、月光を薄明るく反射する小川の水、柳の堤防、遠くにぼんやりと見える野山の縁にある農村集落の文化住宅の灯火、たえることなくまたたくその灯火は、それぞれの喜びと幸福な生活を想起させた... 夜の道には人影が絶えなかった。どこに行って帰るのか、整然と座ってトラクターを走らせる青年男女、三人、四人と連れ立って歩きながら、可愛らしく目の前に手をかざして飛び込んでくるヘッドライトの明りをさえぎる乙女たち、連れ合いができて家から逃げ出した山羊を無理やり引っ張っていく老人... この地にはどれほど多彩で陽気で楽しく、にぎやかな生活が満ちあふれていることだろうか。ああ、なんと良い夜だろうか！ 涙を流して決意を誓ったりリグンウ支配人の顔が朝焼けのようにうっすらと浮かび上がった。いつ見ても陰鬱で荒っぽく振るまっていた支配人が、きょうはどんな人に変身しただろうか。キムジョンイル総書記の信頼と愛によってめざめ、古いものを捨て去り新しい人間となって、巨人のようにたちあがった活動家がどれほど多いことだろうか。信頼と愛の力、信頼と愛の政治！... 目の前に小さな長方形のガラス筒がゆらゆらして、だれか、やつれた顔が浮かんだ。ガラス筒のなかに入っている円錐型^{えんすい}の石灰石... チュサンミンだった。この夜道に、彼の顔がどうして浮かんだのか。...

ひどい誤解に苦しんだあと、石灰石を探し出し、セメント工場を作って質の良いセメントを生産するために、知恵と情熱をすべてささげてきた戦士、いったいどうして彼を支配人に任命しなかったのか？セメント生産を任せても支配人には任命せず「責任者」としてそのままにしておくことをどう考えてきたのか。かれはこの世を去るとき、われわれにたいして、わが党にたいしてどのように考えるだろうか。ありがたいと思うだろうか。恨むだろうか？ 彼がこの世に残していく妻は、子どもたちは？ ... 彼は自分が苦勞して探し出した石灰石を石灰石だと信じたことを その当然のことを、忘れられないと言った。セメント工場を丸ごと任せたことを身にあまる信頼とみなして、骨身をおしまず働いてきた。彼はそんな人だった。

セメント生産を任せながらも支配人に任命しなかったのは、信じながらも信じきれない点があったからだったのか、そうであるなら、何とけちくさい信頼だろうか。彼は党を信じ、すべてをささげてセメント生産に献身し奮闘してきたが、われわれは彼を根拠なく、ただ昔の過ちのために... どれほど不当で偏狭な対応だったろうか。... いつも言葉ではキムジョンイル総書記に学ぶと言っているが、心が熱くないためだろうか、度量が大きくないためだろうか。...

前に走っていた乗用車が止まった。道党責任書記が車から降りてこちらをながめた。道所在地とソントンへの分かれ道にさしかかったのである。

チャヨンジンは車から降りて、彼の方に近づいていった。空から降りそそぐ明るい月の光が、白い舗道に街路樹の影をずらりと映していた。道党責任書記は酒の酔いがまだ覚めやらず、満足そうな顔で言った。

「我が家に泊まって、明日の朝帰らないか？」

「このまま帰ります。月の光もきれいだし...」

パクユンシクは視線をあげて、明るい十五夜の月と宝石のようにきらめく星たちがちりばめられた空を見上げた。

「本当に良い夜だ。きょうの祝宴はよかったね？」

「はい... 新婦が心のきれいな人で...」

「そうだ、教養もあって... これから、リグンウが生気をとりもどすだろう。決意したのを見たかね... 実に、考え深いことだよ。人の問題を解決して、経済をもちたてる方法、これがまさにチュチュエの指導芸術ではないか。党活動、人との活動によって、下部を心から助けながら提起された問題を解決するのではなく、われわれはややもすると行政代行をやっていたのではないかということだよ。道党委員会の活動から、このような角度で全面的に検討してみなければならないな」

「責任書記同志、わがセメント工場の責任者を覚えていますか？」

パクユンシクはげんな顔で彼を見つめた。

「だれだったかな...」

「チュサンミンという、石灰石を探し出したトムムがいたではありませんか？」

「ああ、いつだったか会ったことがあるよ」

「そのトムムがセメント工場に責任をもって献身的に働いてきましたが、われわれは彼を正式に支配人に任命できずにいます」

「思い出した。そのトムムに少し問題があっただろう。...」

「彼を支配人に任命します」

「支配人に？... 信頼できる人か？」

「え？...」

「以前、トムムが彼をセメント工場の責任者におしたたとき、だれからか心配する声を聞いたようだったが...」

「忠実なトムムです」

「ふーん... それなら、もう少し援助して、仕事をさせてみてから任命してはどうかね？」

チャヨンジンは目を伏せて、だれが心配したかとしばらく考えてみて、かろうじて答えた。

「はい...」

二人は言葉少なにあいさつを交わすと、自分の車の方に歩いて行った。明るい月の光を踏みながら
....

(つづく)